
『シャッター』【掌編・文学】

山田文公社

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『シャッター』 【掌編・文学】

【Nコード】

N7871Q

【作者名】

山田文公社

【あらすじ】

瞬間を切り取るシャッター、今日も真夜中の峠で始まる車の宴を撮す。

時計の針は午後二時を指していた。時間に正確であればもうすぐここを通るはずなのだが、まだ現れる気配はない。腕にはめた時計の秒針が進んでいく。やがてしばらくするとスキール音を響かせながら、良く響く低音のエンジン音と、甲高いタイヤの滑る音が聞こえてきた。

そして僅かに二分遅れて姿を見せたのは、日産の白い車体だった。前方のカーブを抜けて目の前を一瞬で通り抜けて、後方のコーナーをスライドするかのようになり、ドリフトで通り抜けて行った。そのあいだ、私は漏らすことなくシャッターを切り、彼の走りを写真に焼き付けた。明日の現像が楽しみだった。

高松峠に腕の良いレーサーが居ると聞き、噂を基に現れると噂される時間前に陣取ってカメラを構えていた。公道レースを取り始めたのは仕事の一環もあったのだが、その迫力は言葉や文章で伝えられないほどに鮮烈であり、その衝撃を少しでも伝える為に写真を撮っている。

無論、公道レースは違法であり、危険ではあるのだが、それで全てを片づけてしまつては、身も蓋もない。多くの者が魅了されて、こうして山に集まつてくる。魅せる走りがここにあるからだ。

その走りを見るべく、ガードレール脇には多くのギャラリーが集まっている。ガードレールを挟んでいるとはいえ、決してそこは安全ではない。そのことをギャラリーは知っている。危険を承知で見ているのだ。この仕事で事故の話聞いたこともあるし、事故に巻き込まれた同僚もいる。

見る側も魅せる側も同じ危険を共有しなければならぬ。それは車という乗り物が改めて凶器であることを嫌でも感じさせられる。

高速でこちらに向かってくる車に恐怖を感じない者はいないだろう。そして目の前をすれすれで通り抜けていく時のスリリングな快感はこの場所に立つた者にしかわからないだろう。

山の上から歓喜の声上がる。辺りが騒然とし始めた。中低音のエンジン音と連続した甲高いスキル音が響いている。私はカメラを侵入コーナー側へと向ける、祭りの夜のような騒がしさが辺りに広がる。しかしエンジン音が近づくにつれて、誰も言葉を発しなくなった。そして山手のコーナーをじっと見つめ始めた。

山手の侵入コーナーのガードレールがヘッドライトに照らされる。黒い車体の鼻先が見えた瞬間にコーナーを滑るようにして通り抜け、目の前を通り抜け、谷側の脱出コーナーをテールランプを赤く輝かせながらすり抜けていく。

「おおおおお！！」

周囲から先ほど起きた山手側と同じ歓喜の声が上がる。鮮やかなハンドリングテクニックと無駄のないコーナーワークはまさしくプロの技だった。辺りから通り過ぎた車の噂話がのぼる。通り抜けた車はランボルギーニ・カウンタック。イタリアの車メーカーが作り出した真正正銘のスポーツカーである。

誰もがその一瞬を目の当たりにした。小気味良いエンジン音は未だに続き、時折スキル音が響いている。力溢れるエンジン音は離れていても聞こえてきた。

幸運にも私はそこに居合わせて撮影できた。

翌日写真は現像され、職場に持ち込むとすぐに掲載が決まった。

若いレーサーの日産のGTRが見開きで掲載され、鮮やかに流れていくように、テールランプを輝かせる写真も掲載された。別の取材班がドライバーへの取材もおこなっていた。

そしてもう一枚のランボルギーニ・カウンタックはドライバーが不明だったために、私が撮った写真のみとなった。テロップは突如現れた謎のカウンタックと表記されていた。

そして掲載された週の届いた手紙の数に編集部全員が驚いた。な

んと各地からそのカウンタックを見たという、目撃情報が多く寄せられたからだ。どうやらあちらこちらで、突然現れて去っていくという情報が届いた。

当然、編集長はこの反応を見て、カウンタックのドライバーの特集を組みドライバーを捜すこととを取材班に命じた。しかし普通そう言ったドライバーは割とすぐに見つかるもののだが、このカウンタックのドライバーはなぜだか見つからなかった。

とはいえ、あの走りは素人ではなく。プロの走りに見えた。そしてプロはこういった雑誌には露出したがらない。スポンサーや企業の絡みもあるし、何よりも違法行為なのだ。世間体を考えるなら露出は避けるのが普通で、それ故に仮に見つかったとしても取材には応じない。

結果として取材班は見つけられずにいた。そしてやがてカウンタックのことは忘れ去れ、三つ目の特集が始まる頃には、言い出した編集長ですらその話はしなくなっていた。

しかし、またも偶然にも私は彼と出会った。

それは天狗峠の取材に向かった時だった。いつもならレース区間周辺には人がいるにも関わらず、誰も見かけなかった。すぐに引き返せば良かったが、せっかくなので山間の駐車場で車を止めて、街灯りの写真でも撮ろうかと思いついて行くと、山の茶屋にある駐車場に一台の車が止まっていて、その車の脇にはオールバックで白いカッターシャツに黒いベストを来た男がタバコをふかしていた。車はよく見ると、あのカウンタックだった。

私は彼に近付き世間話から入り、しばらくして彼に正体を明かした。しかし彼はいろいろな絡みがあり伏せておいて欲しいとお願いされたので、代わりにと言うことで、彼に走行している写真をお願いした。ギャラリーは私だけという贅沢のなか、彼の走りを写真におさめた。

翌日現像された写真を持ち込んだところ、カウンタック特集として掲載されることになった。

時は経ち、車も時代と共に移り変わった。道路交通法も改正されるのが難しくなった。それでも私は魅せる走りを撮り続けている。後任を育てながら、スチルカメラを一眼からデジタルへと持ち替えて撮影を続けている。

あのときの彼もまだ走っているのだろうか、シャッターを切りながら、ふとあのときの光景が頭をよぎる。

変わるもの、変わらないもの、その瞬間をカメラで切り取っていくなかで、今日も刹那を切り取っている。歓声を聞きながら、静かにシャッターを切っている。

何もかもが変わっていくだろう、でも変わらずに引き継がれていくこともある。それは感性なのだ。人の感性だけは変わらない。私はシャッターを切る中でそのことを悟った。

今日も不変の感性を切り取っていく。シャッターが切れなくなる瞬間まで。

(後書き)

お読み頂きありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7871q/>

『シャッター』【掌編・文学】

2011年2月10日01時05分発行